水の精ネックと少年

（スウェーデン）

昔むかし、ある湖のほとりに、貧しいお百姓が、おかみさんと三人の息子といっしょに暮らしていました。やがて、お百姓とおかみさんが死んでしまうと、息子たちは、親たちの残してくれたものを分けることにしました。

いちばん上の兄さんは、

「ぼくは、この家をもらうよ」といって、家を自分のものにしました。二番目の兄さんは、

「じゃあ、ぼくは、家の中にある物をぜんぶもらうよ」といって、テーブルやいすやベッドを自分のものにしました。末っ子のペールは、

「じゃあ、ぼくは何をもらえばいいの」とたずねました。兄さんたちは、笑って、

「そこらをさがして見つけたものをもらえばいいさ」といいました。でも、家にはもう何ひとつ残っていません。あちこちさがして、ようやく部屋の隅に、なわがぐるぐる巻いてあるのを見つけました。ペールは、

「これだって、いつかは役に立つさ」といって、なわをもらって、家を出ました。

やがて、湖のほとりまでやって来ると、ペールは、高い白樺の木のかげにすわって、これからどうやって暮らしていこうかと考えました。

ふと見ると、白樺の木のこずえに、りすが一匹、ちょこんとすわってこちらを見ていました。とたんにペールは、なわの使いみちを思いつきました。

（これでわなを作ってりすをつかまえて、その皮を売って暮らすことにしよう）

ペールは、わなをこしらえると、

「おい、ちびさん、こっちへおいで」と、りすに呼びかけました。りすは、あっというまにわなにかかってしまいました。でも、りすがかわいい目で、びっくりしたようにこちらを見ているのを見ると、ペールは、殺して皮をはぐ気にはなれませんでした。そこで、木の枝でかごを作って、りすを入れました。

「ちびさん、元気を出せよ。じきに友だちを見つけてやるからな」

ペールが待っていると、まもなく、うさぎが一匹飛びだしてきました。ペールは、

「ほいきた。そんなに速く走るなよ。待ってたんだよ」といいながら、わなを投げて、うさぎをつかまえました。そして、りすのかごに入れました。それから立ちあがると、もっと何かいないかと、湖の岸まで下りていきました。すると、やぶの中から枝のピシピシ折れる音がして、大きなくまが出てきました。くまはペールに気付かずに、大きな岩のかげにはいこみ、うつらうつら、ねむりはじめました。ペールは、

（あいつをつかまえるには、よっぽどじょうぶで長いつながいるな）と考えました。そこで、なわをより合わせて太いつなを作りにかかりました。

ペールがつな作りに夢中になっているあいだに、この湖にすむ水の精ネックが、水の面に頭を出しました。そして、魚のような目で、ペールの様子をめずらしそうにながめました。ネックは、

（いったい、あれを何に使うんだろう）と思いました。そこで、湖の底にもどっていって、息子のネックに、
「あの少年が何をしているのか、きいておいで」といいつけました。息子のネックは、さっそく出ていきました。
　ペールがふと目をあげると、目の前に小さな男の子が立っていて、じっとこちらを見ていました。頭には緑の藻をいっぱいつけて、ハスの葉っぱの服を着て、髪にきれいなハスの花をさしていました。
「ぼくらの湖のそばで、きみはいったい何をしているの」と、男の子はたずねました。ペールは、これはネックに違いないと思いました。もしそうなら、うまく返事をしないと、水の中に引きずりこまれてしまいます。そこで、ペールはいいました。
「湖をしばってやろうと思ってつなをこしらえているのさ。このつなができたら、君たちの湖ももうおしまいだよ」
　ネックの子は、急いで父親のネックの所に引き返していいました。
「湖をしばろうと思って、つなをこしらえているんだって」
「なんだって。じゃあ、もういちど引き返していって、あいつと木の登りっこをするんだ。そして、あいつがくたびれたところで、水の中に引きずりこむんだ」
　ネックの子は、もういちど水から出てきて、ペールに、白樺の木を指さしていいました。
「ぼくと、この白樺の木に登りっこしないか。どっちが速く登れるか、競争しようよ」
ペールは、
「ぼくは、今仕事があるから登れないな。でも、小さい弟がいるから、あいつに登らせよう」といいました。そして、かごの口を開けて、りすにいいました。
「おい、弟。出てきて、木の登りっこをしてごらん」
りすは、ひとはねしたかと思うと、ネックの子が登りだすひまもなく、もうてっぺんに着いていました。ネックの子はがっかりしてもどっていきました。そして、父親にいいました。
「あの子は仕事があるから登れないといって、代わりに小さい弟を登らせたの。そしたら、その子はとってもすばしっこくて、目にもとまらぬ速さでてっぺんまで登っちゃったんだ」
父親は、
「くよくよするな、ぼうや。もういちど引き返していって、こんどは、かけっこをやってごらん。おまえほど速くは走れやしない。あいつがくたびれたところで、水の中に引きずりこむんだ」
　ネックの子は、もう一度出てくると、ペールに、
「ねえ、ぼくとかけっこをしないか」といいました。ペールは、
「おまえ、ぼくがいそがしいのがわからないのか。でも、もうひとり弟がいるから、そいつにやらせよう」といいました。そして、かごの口を開けて、うさぎにいいました。

「おい、弟。出てきて、うんと速く走ってごらん」
うさぎは、とび出すと、走りに走って、ネックの子が走りだすひまもなく、たちまち姿が見えなくなってしまいました。ネックの子は泣きべそをかきながらもどっていきました。父親は、
「もういちどだけ試してみるんだ。あいつを片付けないと危険だからな。こんどは、相撲を取ってごらん。まさかおまえほど強くはないだろう。あいつを負かして湖につき落としてやれ」といいました。
　ネックの子はまた出てきて、ペールに、
「ねえ、ぼくと相撲を取ろう」といいました。ペールは、
「ぼくには、そんなひまはないっていってるだろう。でも、ほんとにやりたいんなら、あそこにぼくのおじいさんが寝ているから、やってごらん。先に耳をボインとぶって、起こしてやるといいよ」といって、岩かげで寝ているくまを指さしました。ネックの子は、くまの所に行って、
「相撲を取らないか」とききました。くまは寝返りを打っただけで、起きません。そこでネックの子は、くまの耳をボインとぶちました。くまは怒って起きあがり、前足でネックの子の肩を力いっぱいなぐりつけました。ネックの子は思わずひざをついてしまいました。やっとのことで湖の底に逃げかえると父親にいいました。
「おお、こわかった。とてもあの子には勝てないよ。弟たちはあんなに小さいのに、木登りもかけっこも速いし、おじいさんは年をとっていてあんなに眠そうなのに、ひと打ちでぼくをころばしたんだ。あの子が自分で出てきたら、どれほど強いか分からないよ」
父親は、
「それじゃあ、うまくやらないと、わしらは家も命もなくしてしまうかもしれん。もういちどあいつの所に行って、金をいくら出したら、湖をそっとしておいてくれるか、きいてきてくれ」といいました。
　ネックの子は、またまた出てきました。ペールは、恐い顔をして、
「また来たな。まだやる気か」といって、そでをまくり上げました。ネックの子はあわてて、
「いいえ、ちがうんです」とさけびました。「こんどは、お金をいくら出したら、湖をつなでしばらないでくれるか、ききにきたんです」
ペールは、
「それなら、話は別だ。ぼくの帽子いっぱいの金貨でどうだい」と答えました。ネックの子は、
「それくらいならいいと思う」といって、もどっていきました。
　ペールは急いで、自分の帽子に大きな穴を開けました。そして、地面に深い穴を掘り、その上に帽子を乗せました。そこへ、ネックの子が、重い金貨の袋を背負って、よちよちやって来ました。それから、金貨を帽子のなかへ入れはじめました。ところが、帽子がいっぱいになったら残りは持ってかえるつもりだったのに、いくら入れても帽子はい

っぱいになりません。ぜんぶ地面の穴の中に落ちてしまったのですが、ネックの子は気がつきませんでした。ペールは、
「これっぽっちじゃ、帽子の底がかくれただけだ。帽子いっぱいの約束だぞ」といいました。
ネックの子は、もういちど湖の底に引き返しました。父親が、
「残りの金は持ってかえって来ただろうな」ときくと、ネックの子は、
「ううん。まだ足りないの。やっと帽子の底がかくれただけだもの」と答えました。そこで、父親は、もっと大きな金貨の袋を出してきて、
「これだけで許してくれっていうんだよ。これで有り金ぜんぶだからな」といって、ネックの子にわたしました。
ネックの子は、重たい袋を引きずってきてペールの前に置くといいました。
「ねえ、これでかんべんしておくれよ。うちにあるお金をぜんぶ持ってきたんだもの」
ペールは、
「しかたないな。かんべんしてやるよ。湖はそっとしておいてやろう」といいました。
ネックの子はほっとして、湖の底にもどっていきました。
ペールがたくさんの金貨を持ってうちに帰ると、兄さんたちはあきれかえって、
「どうやってこれだけの金貨を手に入れたんだ」とたずねました。
「兄さんたちの残してくれたなわで、りすなんかの動物をつかまえて、それでもうけたのさ」と、ペールは答えました。兄さんたちは、
「家も家の中の物も、みんなお前にやるから、どうかそのなわをゆずってくれないか」とたのみました。
「いいよ」
ペールが承知すると、兄さんたちはなわを持って、喜び勇んで家を出ていきました。ふたりはたぶん今でも、なわを持って動物たちを追いかけ回していることでしょう。
ペールは、貧しい小さい家の代わりにりっぱな大きな家を建て、広い土地の持ち主になって、末永く幸せに暮らしたということです。
おしまい

村上郁再話

資料『北欧の民話』山室静著／岩崎美術社